
なのはStS再構成SS「COMBINATION ATTACK!!」

枇紗簾

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

なのはS t S再構成S S「COMBINATION ATTACK
K! !」

【Nコード】

N 9 4 2 0 X

【作者名】

枇紗簾

【あらすじ】

機動六課にある男の子と女の子がやってくる。
男の子はコンビネーションが上手く。
女の子は思念制御がずば抜けて高い。

そんな二人が機動六課で最高のコンビネーションを目指していく話
始まります。

キャラクター紹介

始めまして、枇紗^{びっしや}簾と申します。

初めてSS書きました。なのはSSでグダグダですがどうかお付き合いを。

まず始めにキャラクター紹介からです。

なのはSttS再構成SS「COMBINATION ATTACK
!!!」

登場人物

リンクIIザIIフォンティナ

本作の主人公その1。近代ベルカ陸戦近接式魔術ランクB+、魔力ランクA-の執務官「志望」だった少年。18歳。

執務官育成学校所属中だった彼に、機動六課を設立した八神はやてが目を付け半場強引に引き抜き。

彼自身は引き抜かれたことに反論はせず、むしろ憧れのフェイト執務官の仕事を間近で見ることが出来ると知って軽く興奮気味。

本作では試験さえ受けて合格すれば執務官になれるので執務官学校に1年機動六課に留学させてもらうということで話がついている。

名前の通り、幼い頃からタイミングを合わせることが得意で、いまや時空管理局のヴィータ副隊長の突撃にすら合わせることが出来るように。

コンビネーション能力はずば抜けて高い能力を持っている。

彼の専用デバイスはまだないが、執務官が戦闘を行うこともあるの

で学校で支給されたスバルと同じナツクル型のストレージデバイスを使っている。

スバルとは昔から仲のよい友達で、訓練で危険度が低いロストロギアの収集でたまに一緒になり、恐るべきコンビネーションを発揮し中々の知名度を持っている、仲間や管理局には「2色の閃光」という名前で呼ばれているほどだ。

リンクは執務官志望だったためか、その場にあわせた攻撃コンビネーションを即座に作り出すことが出来る。スバルと同じく近接攻撃しか持ち合わせていないため（後々砲撃を使うようになる予定）基本的にスバルと一緒にウイングロードで突撃する方法になっている。（まだリンクはウイングロードを使えないため、スバルのウイングロードに乗っている）

得意技 コンビネーションアタック・相手の動きに合わせること
友人からはリンの名で呼ばれることが今度多くなるだろう。

ティオール＝ランドルク

本作の主人公その2。近代ミッドチルダ広域砲撃式魔術ランクB、魔力ランクA-の女の子。10歳。

ある次元で勤務中のフェイト・T・ハラOWNに助けられ、身寄りのなかったティオールはそのままフェイト・T・ハラOWNについてくることに。

テストロッサの教育で、ライトニング部隊として機動六課に加入。主に後方からの援護を得意にしている。

大掛かりな砲撃魔法は使えないが、アクセルシューター、バインドなどの基本魔法のコントロールだけはなのはたちと同じくらいのA

A+ほどのずば抜けた能力を持っている。しかし機動力等がないので、技術的にはB-ほどに落ち込む。

テストロッサやなのはに育てられたせい、好奇心旺盛で明るい女の子である。それと同時に場の空気を和らげるムードメーカー、ないしトラブルメーカーでもある。

アクセルシューターを思念誘導し、見えない数キロ先の的にぶつけることが出来るので、広域探索魔法や結界魔法など、補助的な魔法が多く取り揃えられている。

得意技 遠距離からのアクセルシューター思念制御
なのはたちからはティオと呼ばれている。

こんなオリジナル主人公を迎えて書いて行きたいと思いますので、よろしく願います。

キャラクター紹介（後書き）

完結できるかなコレ・・・（；、）、（

出会い、そして訓練 01（前書き）

てことで実は少し出来てたり。
のんびりと進めていきますね。

出会い、そして訓練 01

なのはS t S再構成S S「COMBINATION ATTACK
!!!」

序章「出会い、そして訓練」

ティアナ「ここが機動六課…」

ティアナが大きな建物のエントランスで眩きをもらした。

スバル「ほら、早く行かないと最初の集合に間に合わないよっ」

ティアナ「遅刻寸前まで家の布団から出てこなかったのあんたじゃない！私は悪くないわ！」

ティアナの軽い拳骨がスバルの後頭部に当てられる。

スバル「いたっ、ティア、ひどいよお…」

ティアナ「泣いてる暇があるなら走りなさい！ホントに遅刻しちゃうわよ！」

スバル「ふえっ、ティア、置いてかないでよぉっ！」

ティアナとスバルはお互いを罵倒しながら、それでも顔には笑顔を浮かべ、笑いながら走っていく。

それをある一室でカメラを使い観察している者がいた。

はやて「ほんまにだいじょうぶやろなあ・・・」

機動六課設立者兼部隊長のはやては心配気に呟いた。

ここが機動六課…ね…

そして、新しい者が機動六課の扉を叩く。

なのはS t S再構成S S「COMBINATION ATTACK
！！」序章「出会い、そして訓練」

はやて「選り抜かれた者たち、ようこそ機動六課へ、私は部隊長の
八神はやてや、よろしくたのむな」

なのは「始めまして、高町なのはです。主に皆の身の回りの世話を
してゆくの何か困ったことがあったら遠慮なく言ってね、よろし
くおねがいます、で、フェイトちゃんは？」

はやて「いまあと一人迎えに行ってる、じきに来るやろ」

なのは「そっか、じゃあ一足先に皆に自己紹介してもらおうかな。
出身とランクくらいでいいか」

ティアナ「では私から。私はティアナ・ランスター。ミッドチルダ
西部エルセア出身で、魔術ランクは陸戦C。銃撃を主体にしていま
す。これから一年間、よろしくおねがいます」

スバル「私はスバル」ナカジマ。ミッドチルダ西部エルセア出身の
魔術ランクはティアナと同じく陸戦Cです。近接戦闘を主体に戦っ
ています、よろしくおねがいます」

はやて「ん・・・スバル」ナカジマといえば・・・」

なのは「管理局では『二色の閃光』って通り名で有名じゃない？相
方はなんて名前だったっけ・・・」

スバル「リンク」ザ「フォンティナですね、彼は私の昔からの友人
です」

そうついた瞬間に、はやてとなのはは動きを止める。

ティアナ「・・・どうしました？」

はやて「・・・いやあ」

なのは「偶然ってほんとにあるんだなって」

ティアナとスバルは首をかしげる、そんな時だった。

フェイト「ただいま。連れてきたよ」

なのは「おかえり」。後ろにいる男の子がそうかな？」

スバルとティアナは男の子なんだ・・・と視線を動かす。

スバル・ティアナ「・・・え？」

リンク「・・・本日付で機動六課に配属されました、リンク「ザ」フォンティナです、よろしくおねがいしま・・・ってえ？スバル？ティアナ？」

スバル達がよく見知った顔が、そこにあった。

はやて「これはまあ・・・何たる偶然」

なのは「『二色の閃光』の二人がここで揃うとは予想外だね・・・」

リンク「『二色の閃光』・・・それって僕達のことですか？」

はやて「そうや、君たち、中々に管理局の中では有名もんやで？」

スバル・リンク「・・・知らなかった・・・」

はやて「なんや、自分達がそこまで強くないとおもつとるんか、二人でのコンビネーション攻撃は技術ランク的にAAオーバーやで？ティアナ「ええっ！凄いじゃない、スバル！」

スバル「ええ・・・私はリンの言うこと聴いてるだけだよ・・・？」

リンク「気安くあだ名で呼ぶな・・・俺は場に合わせて攻撃プランを練ってるだけだ」

なのは「・・・あんな魔力弾が大量に飛び交う中で攻撃プランを練ってるの？」

リンク「回避だけには自信があるんで。自分は作戦を組み立ててスバルに実行してもらい、それに自分のタイミングを合わせているだけです」

なのは「タイミングって・・・「ああっ！！」ってどうしたの？はやてちゃん！？」

はやて「もしやあんた・・・『グッドタイミング』の名で知られる・

・あのリンクかあつ!？」

リンク「ええ・・・なんかそう呼ばれてるみたいですね、ていうか部隊長、僕を引き抜く際にそういう情報はなかったんですか？」

はやて「書類見ただけでビビッときたんでなあ・・・忘れてたわ」

リンク「はあ・・・じゃあ改めて自己紹介させていただきますね。

僕の名前はリンク「ザ」フォンティナ。仲間達からはリンの名称で呼ばれています。執務官学校「所属」だった者で、ミッドチルダ出身・・・詳しい場所は知りませんが・・・魔術ランクはB+、スバルと同じ近代ベルカ近接式です。よろしくおねがいします。」

なのは「・・・執務官学校所属だった者って？」

リンク「はやて部隊長に引き抜かれたときに、学校には一時退学兼留学しているという風に伝えてあるんです」

フェイト「・・・なぜはやて部隊長の引き抜きに応じたの？」

リンク「貴方の傍で仕事を見たいからです、フェイト執務官」

フェイト「・・・えっ？私？」

なのは「ああ・・・フェイトちゃんは執務官だからね・・・なるほど、いろいろと学びに来たんだね。ティアナも執務官志望だったっけ？」

ティアナ「ええ・・・そうですけど」

リンク「ティアナほど自分は技術がないんで、いろいろと教えてください」

ティアナ「・・・さりげなく嘘つくんじゃないわよ、どう考えてもあんたのほうが指揮技術は上じゃない」

リンク「団体は指揮したことがなくてね・・・僕はティアナの指示通りに動くからさ」

ティアナ「・・・私がリーダーなの？」

はやて「そうや、この機動六課フォワード陣は、あんたがまとめるんやで」

スバル・リンク「ティアナ、よろしく(な)！」

ティアナ「・・・ふう、わかりました、これからよろしく頼むわよ、

みんな」

リンク「・・・ところで、あそこで遊んでる子供3人は？」

フェイト「ああ・・・あれも貴方たちの仲間よ、おーい、エリオー、キャロー、ティオー」

????「「「はい!」」」

子供3人がフェイトの声に反応しこっちにかけってくる。

リンク「・・・この子達は？」

フェイト「うーん・・・私の家族の3人かな、こっちの男の子がエリオ。この女の子がキャロ。最後の女の子がティオールっていうんだ」

エリオ「あなた方が今日から私たちのお兄ちゃん、お姉ちゃんになるのですか？」

リンク、スバルティアナともの噴出す。

スバル「どどど、どういうことですか!? フェイト執務官!」

はやて「これから同じ部隊で戦うんや、家族も同然やろ? べつにいいやないか、なあ、なのはちゃん？」

なのは「リンクくんは弟と妹が出来て満更でもない顔してるけどね」

ティアナ「・・・リンクってロリコンだったのか・・・」

リンク「違うわっ!・・・っと、君達が今日から家族になる子たちなんだね。よろしくおねがいます・・・かな？」

エリオ「・・・お兄ちゃんって呼んでも良いのですか？」

リンク「おお、呼べ呼べ、好きにしたら良い、だってお兄ちゃんになるんだから。ね? フェイト執務官？」

フェイト「・・・案外リンクが面倒見てくれそうで助かるわ。その子達、よろしくね」

リンク「ええ、任せてくださいな」

スバル「・・・リンクの適応力が凄い」

ティアナ「私たちじゃあんなこと出来ないよ・・・」
軽く凹む二人であつた。

出会い、そして訓練 01（後書き）

とまあ、のんびり展開で進んでいきますよ。

次回はぼこぼこにされる模擬戦をやるうかと思っています。
ではでは。

出会い、そして訓練 02 (前書き)

模擬戦まで行かなかった… (; 旦)
次こそは模擬戦編を . . .

出会い、そして訓練 02

なのはS t S再構成S S「COMBINATION ATTACK
！！」序章02

出会い、そして訓練

リンク「・・・ここは？」

なのは「訓練施設だよ？」

リンク「・・・どうみても全員が動き回れるスペースではないのですが」

なのは「ふふっ、みててね」

そういとなのはは手元にあるコンソールを叩いた、その瞬間。

スバル「・・・おおっ！？」

ティアナ「なにっ・・・これ・・・っ！？」

リンク「一瞬にしてビル群のステージに・・・！？」

なのは「ここは管理局の最先端技術を使って作った訓練施設だよ。

実態があるから触れるし、訓練にはもってこいだね」

フォワード陣は驚きで声が出せない。さらにそこにとどめが入った。

なのは「皆には今からここで、私一人を相手に模擬戦をしてもらいます」

顎が外れるぐらいにあんぐりするフォワード陣。

なんせ管理局のエース・オブ・エースと呼ばれる女性だ、勝てるわけがない。

なのは「今日は皆の腕を見るだけだから、攻撃は特にしないよ、皆で協力して私に一発入れたら今日は終わり。簡単でしょ？」

彼女が鉄壁のプロテクションを持っているのをフォワード陣は事前から知っている。全員でかかって勝てるかどうか・・・

リンク「・・・分かりました。やりましょう」

ティアナ「リンク！？やる気なの！？」

リンク「逃げてても仕方ないだろ、やれることやって情報取ってもらって最適な訓練をしてもらうのが最善だと思うけど？」

なのは「その通り、これで大体の皆の長所とか短所とか一気に掴ませて貰うから、全力全開で私に突っ込んできてっ！！」

「……はいつ！！」「……」

全員分の声が響く。そこでリンクは気づく。

リンク「そっぴやエリオ達の紹介を聞いてないな。仲間の力は知っておいたほうが良い、頼むよ」

エリオ「……あっはい！僕の名前はエリオ・モンディアルです。

陸戦Bランクの近代ベルカ近接式です」

キャロ「ええと……私の名前はキャロ・ル・ルシエです。陸戦C＋ランクの竜召還士です、この子が私の友達、フリードです」

フリード「きゅくるー」

竜召還士が、珍しいなと思いながらリンクは最後の少女に目を向ける。

ティオール「私の名前はティオール＝ランドルク！空戦B－ランクの近代ミッドチルダ式だよっ気軽にティオって呼んでねっ。りんにい！！」

リンク「りんにいっ……！？まあいいか、これからよろしく頼むよ」

「……はいつ！！」「……」

なのは「まだみんな自分専用のデバイス持っていないよね？スバルのリボルバーナックルはともかく、リンクのは支給されたデバイス？」

リンク「ええ、学校から支給された奴です。メンテナンスでも？」

なのは「いいえ、今回の結果から皆に合ったインテリジェントデバイスを作ろうと思うの。これから皆は前線で戦うのに一人じゃ辛いから、人工知能をもったデバイスで補おうと思って」

全員の顔が晴れる。

スバル「皆のを作ってもらえるんですかっ！？」

なのは「ええ、前線で戦ってもらえる貴方たちになら、開発費のち

よつとやそつとは動かせるよ。皆も、どんなデバイスにしようか考えておいてね」

「………はいっ！」「………」

なのは「じゃあ模擬戦を始めようか。みんなバリアジャケットをまとつて！」

それを合図に、皆の服装が変わり、それぞれのストレージデバイスが構築される。

リンク「スバルと俺はお揃いなんだよね」

スバル「おそろっ……！？こんな時に何言つのさリンっ！？」

なぜかスバルは顔を赤くしている。なんでだろうか？

ティアナ「昔からリンクの鈍感な感じは凄いわね……」

リンク「ん、何か言ったか？」

ティアナ「貴方が馬鹿と言ったのよ」

リンク「おい」

なのは「ほらほらみんなぐっ、配置について！」

ひとまず僕らは所定の位置につく。

エリオは槍、キャロは手袋、ティアナは杖らしい。

リンク「槍か……男のロマンだな……」

なのは「じゃあいつくよっ！模擬戦、スタートっ！！」

そして俺らは、同時になのはさんに向かって突撃していく――

出会い、そして訓練 02 (後書き)

短い短い。

次は長くなる予定です。

ではでは。

出会い、そして訓練 03（前書き）

模擬戦編。リンクとスバルが良い感じに決めています（え

出会い、そして訓練 03

なのはS t S再構成S S「COMBINATION ATTACK
！！」序章03

出会い、そして訓練

ティアナ「リンクはスバルと一緒にウイングロードで突撃！！進路は任せるわ。エリオ！キャロ！ティオ！貴方たちは私と一緒にリンクとスバルの援護！『二色の閃光』の実力、見せてもらいなさい！！！！」

「はいつ！！！！」

なのは「さて・・・コンビネーション、見せてもらうよっ！！」

そっぴいながらなのはは、一気に30機ほどのアクセルシューターを出す。

リンク「攻撃しないって言ってなかったけ・・・まあいいや、スバル！放物線上にロードよろしく！！」

スバル「了解！！」

ズドンッ！！とスバルがその場で地面を叩くと水色の魔法で作られた道がなのはに向かつて伸び始める。

リンク「いくぞ！スバル！」

スバル「おりゃああっ！！」

リンクとスバルはウイングロードを二人で並走してなのはに怒涛のスピードで突撃していく。

なのは「はやいつ・・・！！でもまだまだ！！」

なのはは10機ほどのアクセルシューターをリンクたちに放つ。

しかしリンクはその攻撃を読んで、スバルに作戦を開始させるリンク「行くぞスバル！！作戦ナンバー003、フォーメーション

ォー！！！！」

スバル「了解っ！！そおれえっ！！」

突如リンク達が乗っていたウイングロードが裂け、リンクが乗っていたロードはリンクを上へ跳ね除けるような動きに、スバルのほうは下のほうへ伸び、さらにスバルを加速させる。なのはが放ったアクセルシューターは何もない空間を過ぎていく。

なのは「なっ!?!」

リンクがロードから離れ放物線上になのはに襲い掛かる。

リンク「うおおおおっ!!!」

なのは「くっ……」

なのはは20機残っていたアクセルシューターをリンクに向かって放ち、プロテクションで身を固める。リンクは一気に打ち出されたアクセルシューターをもとめせず、こちらに突っ込んでくる。

なのは「これだけの数の魔力弾をみて動揺しないなんて……さすがリンク「今だっ!!スバル!!」……えっ!?!」

なのはが振り返ると、リングと同じように放物線を描きながら飛んでくるスバルの姿があった。

なのは「はやいっ……レイジングハート!防御よろしく!」

レイジングハート(了解です、マスター)

アクセルシューターを破ったリンクと、不意を付いて後ろから殴りかかった二人のナツクルが、なのはのプロテクションに突き刺さる。

エリオ「……二人とも凄い……」

キャロ「息がすごい合ってる……」

ティオ「りんにかっこいい!がんばれっ!」

ティアナ「あいつらのコンビネーションには付いていけないわ……まったく……」

エリオ・キャロ・ティオは憧れの目、ティアナは呆れ半分の苦笑いを浮かべた。

なのは(なかなかやるね、レイジングハート)
レイジングハート(でも、マスターには敵いません)

なのは（ええ？私これでもかなり限界だよ？）

レイジングハート（今の貴方にはリミッターが付いてますから。付いてなかったら先ほどのアクセルシューターも外さなかったでしょう？）

なのは（あはは・・・さて、レイジングハート、どうする？）

レイジングハート（防御は私がやりますので、ご自由に）

なのは（うん、ありがと。レイジングハート）

リンク「うおおっ・・・かつてえええっ！！」

スバル「おりやあああっ！！全然砕けないよっ！！」

周りは煙に巻かれて見えないう、そんな時にリンクは一瞬だが、プロテクション内から大きな光を見た。

リンク（あれは・・・まさかっ！？）

思い当たる節を見つけるとスバルに向かって叫んだ。

リンク「一旦引くぞ！！なんかやばい！！」

なのは「御名答」

スバル「・・・うおおっ！？何あれっ！！」

なのはの持つレイジングハートの先端は既に砲撃モードに入っており既に砲撃魔法の準備が整っていた。

なのは「身に痛みを知っているのも訓練だから」

リンク「・・・ティアナ、エリオ、キャロ、ティオ！援護を！！」

「・・・はいつ！！」「・・・」

既にリンクとスバルが作った5層プロテクションの上にさらに5層のプロテクションがかかる。

なのは「そんなもので防げると思ってるの？」

リンク「え・・・」

既になのはの魔方阵は完成しており、腕を振り下ろせば放てるという状態だ。回避は不可能。

なのは「じゃあ受け止めてね！！私の全力全開！！アクセル・・・デバイン・・・バスターーーッ！！！！」

なのはの前面からアクセルシューターをまとったデイバインバスターがリンクたちの張ったプロテクションに激突する。

ティアナ・エリオ・キャロ・ティオ「うぐぐぐうう・・・」

ティアナ達が張ったプロテクションが1枚・・・2枚と徐々に破壊されていく。

そしてリンクたちが張ったプロテクションに差し掛かった。

リンク「うおお・・・！！なんつー威力・・・！！」

スバル「このままじゃ防ぎ切れないよ・・・どうしようっ！！」

リンク「・・・スバル、ウイングロード出せるか？」

スバル「・・・何する気？」

リンク「最後のプロテクションが割れた瞬間に俺とお前でウイングロードを使用したパンチを叩き込む」

スバル「・・・危険な賭けだねそれ・・・」

リンク「でも、やってみなきゃわかんねえだろ？（にやつ）」

スバル「・・・リンのにやにや顔気持ち悪い」

リンク「ひでえなあ・・・で、やってみるか？」

スバル「ええ・・・いくよっ！！」

ウイングロードが砲撃の下をなのはの方向へ走っていく。砲撃中のなのはも戸惑いを隠せない。

なのは「・・・何する気なんだろ・・・レイジングハート！！出力UP！！」

レイジングハート「a l l l i g h t m y m a s t e r」

さらに砲撃の威力が上がる。2個プロテクションが吹っ飛んだ。残り1つ。

リンク「せーのでいくぞ！スバル！！」

スバル「準備OKえ！！」

リンク・スバル「せえーのっ！！」

パリン。最後のプロテクションが割れる。桜色の壁が迫ってきているというのに2人は怖さを感じなかった。

・・・ズドンッ！！

二人の小さい拳が、大きな砲撃に突き刺さる。
小さいながらも、砲撃を押し返していく。

なのはは驚きを隠せない。

なのは「プロテクション無しで砲撃を防いでるのっ!? 無茶苦茶だよっ!!」

さらに出力がUPする。

リンク「うおおおおおっ!!」

スバル「うああああああっ!!」

既に二人の姿は見えない。しかし彼は聞いた。

リンク・スバル「今だ!! エリオ!!」

エリオ「...っ!! ソニックムーヴ!!」

エリオが槍型デバイスを構えて突進する。

なのは「なっ!?!」

なのはが気づく頃には遅かった。

プロテクションを起動するが一足エリオが早かった。

プロテクションに阻まれ槍形デバイスは動きを止めたが... なのはの腰に僅かながらエリオの槍が食い込んでいた――

なのは「まったく... なんてあんな無茶するかな、はあ」

なのははため息混じりに首を振った。

シャーリー「でも良い結果が取れましたよ」

なのは「でもさあ... 肝心のリンクとスバルが怪我しちゃねえ...」

シャーリー「怪我させるような攻撃をしたのはなのはさんですよ」

ニヤニヤ「」

なのは「...うー」

リンクとスバルは動けないのかボロボロのバリアジャケットのま
ま担架に乗せられて医療室に向かった。

運ばれてる最中、リンクはスバルに話しかけた。

リンク「俺ら、頑張ったな」

スバル「うん、頑張ったよ」

二人は運ばれながら、子供のような笑みを浮かべていた。

出会い、そして訓練 03（後書き）

以上、模擬戦編でした。

次回は皆のデバイスの話をしようと思います。
では。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9420x/>

なのはStS再構成SS「COMBINATION ATTACK!!」

2011年10月26日14時07分発行